

茅風



Breeze from the field of thatch-grass

2007年12月11日
森林塾青水
事務局便り
茅風通信 23号



撮影：清水英毅

刈り集めた茅ボッチの前で 久さん 三郎さん

2007年7月～11月の活動報告(事務局)..... 1

特集：生き物調べ

- 生き物調べ(海老沢秀夫)..... 2
- 久しぶりに見たススキ草原(高野史郎)..... 2
- 上ノ原の自然にふれて(高川晋一)..... 3
- 樹木医、藤原の森に学ぶ(伊東伴尾)..... 4
- 甘くさわやかな草の香り(橋本八千代)..... 5
- 青木沢峠古道整備を終えて(小野丞)..... 5

特集：茅刈り

- 環境プランナーから見た森林塾の取り組み(上原健)・6
- 茅刈り体験をしてみた見た夢のお話し(足本裕子)..... 7
- 「森を楽しむ会」藤原遠征記(牛込晴三千)..... 8
- ブータンと上ノ原の森(小堤涼子・さら)..... 8
- 茅刈りってカンタン(大前清祿)..... 9

会員・会友だより

- 山の神様に感謝(内野みつ子)..... 9
- 雲越家住宅修復工事着工(木村伸介)..... 10
- 「同行二人」発心の道場編(川端英雄)..... 10
- 第7回講座 commons の案内..... 11
- 編集後記～塾長のつぶやき～..... 11
- 巻末：「生き物調べ」リスト

2007年7月～11月の活動報告

(事務局)

7月10日;(財)ダム水源地環境整備センターのご要請に応じ、浅川・清水が訪問、当塾の活動とフィールドの紹介かたがた水源地域資源の活用策につき意見交換。

7月13日;麗澤中「水源の森フィールドスタディ」。中学1年生120名余を迎えて「自然にふれあい自然に学ぶ」楽しい学習会。終日、児童たちの喚声が森に木霊(こだま)した。湯本リーダーはじめ、浅川・海老沢・岡田・大田・佐山・高野・富田の皆さんと地元の泉さん・武さん、ご苦労さまでした。

7月23日;川越小「里山探検隊」。5年生30余名を迎えて、上ノ原の森～雲越家住宅～明川集落・「郷土館」のコースで里山ウォッチング。湯本、内野(雄)、内野(み)、三好、清水が担当。飛び入りの湯本恵子ちゃんもふくめ、ご苦労さまでした。



9月8日～9日;第4回講座「commons村ふじわら」。管理道兼散策路の道普請と生き物調べ()。参加者11名、この時期に咲いていた草花50余種に出会うたびに感嘆しきりであった。

10月13日～14日;第5回講座「commons村ふじわら」。初日は、(財)日本自然保護協会の高川晋一さんをお迎えして生き物調べ()。2日目は、昨年再生した青木沢峠の道普請。初日夜の交流会は高川講師のもと、生物多様性国家戦略とモニタリングサイト1000の学習会となり、参加18名一同、久方ぶりにアカデミックな雰囲気。

10月19日～20日;NPO自然遊学主催「秋の水上交流会」に参加(清水)。当塾のフィールド・活動を紹介、交流の輪をひろげる。朱美ちゃん(理事長)、直美ちゃん(副理事長)お世話さまでした。来年も是非、続けて下さい。

10月20日～21日;藤原ダム50周年・矢木沢ダム40周年記念「利根川・江戸川上下流域交流フォーラム」に参加(浅川、川端、清水)。(財)ダム水源地環境整備センター・渡辺理事長一行を上ノ原のフィールドにご案内。リレートーク、交流会の場を通じて当塾のフィール



ド・活動を紹介。

10月27日～28日；森づくりフォーラムとの共催「茅葺き視察と茅刈り体験」ツアー。明川集落ならびに雲越家住宅の茅葺屋根・修復現場を視察の後、地元の久さん、三郎さん、惣一郎さんの手取り足取りのご指導のもと、参加15名で茅刈り体験。刈り取った茅は計105束（21ポッチ）！郷土館の大坪（義一）さんご夫妻、雲越家住宅の安房子さん、お世話になりました。

11月10日～11日；第6回講座「コモンズ村ふじわら」。茅刈りと山の口終い。初日午前は雲越家・修復現場の視察とカマ研ぎ。昼飯は、5キロも採れた自社製(?)のナメコ汁＝内野スペシャルに各自持参のお弁当。午後1時、みなかみ町から登坂教育長、木村観光商工課長ならびに地元・熊木区長を迎えて「山の口終い」行事。長老・林久さんと町田社長を先頭に参加者40名が居並び、一同この1年の森の恵みに感謝し、茅刈り作業の安全を祈願。午後、久さん・萬枝さん・惣一郎さん・町田社長のご指導のもと全員参加で茅刈り開始。何と、来賓の教育長さんまでもカマを振るわれて、刈り取った茅の合計は（久さん、三郎さんがこの日までに刈りためた分が殆んどとは言うもの）およそ2000束（400ポッチ）！！

夜は、地元の皆さんをお招きして、スライドを見ながら1年間の活動の振り返り。続いて、岩井さん（市川市議）ご夫妻、足本さん（「文化遺産を未来につなぐ森づくりの為の有識者会議」事務局長）や「小平の森林を楽しむ会」のご一行はじめ初参加の皆さんのご挨拶・自己紹介など交流会。やがて、ビール1ダース引っさげ飛び入りの「金盛館」女将・須藤さんが入会宣言するにおよんで一同、大いに盛り上がり宴たけなわをむかえた。

町田社長から貴重な資料の提供とお酒の差し入れ。木村さん、久さん・三郎さん・萬枝さん・惣一郎さんから地酒、成瀬さん（森づくりフォーラム）からは中国土産の高梁酒、林昭さん（町役場・総合政策課長）からもご芳志を賜りました。お心遣い、ありがとうございました。内野ご夫妻、今回も仕出しと心温まるナメコ汁、そして果実酒のあれこれ沢山ありがとうございました。（*^、^*）

11月16日；「全国草原再生ネットワーク」設立総会。浅川、海老沢、清水が参加。当塾の取り組みを発表、全国デビュー。

7月4日、9月5日、10月3日、11月7日；
定例幹事会&「茅風通信」編集会議。

特集：生き物調べ

生き物調べ

海老沢秀夫

9月（第4回）と10月（第5回）の講座「コモンズ村・ふじわら」で、「生き物調べ」をしました。結果を巻末に掲載します。まちがいもあるかもしれませんが。追々修正しつつ、これからも「生き物調べ」を継続し、一覧表を大きくしていきたいと思えます。

上ノ原の生き物についてはこれまでも、2003年

の植生概況調査、2004年からの多葉田さんによる観察、毎年講座「コモンズ村」でのフィールド調査など、随時、記録してきました。いちばんまとめた報告は、2005年にまとめた「地域資源調査報告書」です。こうした過去のデータを整理し突き合わせ、より統一のとれた「生き物」リストにしていく作業も必要です。ご協力、お願いします。



オオマルハナバチ

撮影：清水英毅

上ノ原は、小規模ながらも「ススキ草原」「ミズナラ林」「水辺」がセットになったユニークな自然地です。近くに集落や人工林もあります。生物多様性にとって、とても好ましい条件をもった場所といえます。草原性の動植物だけでなく、森林や水辺の生き物も見られます。今度の「生き物調べ」でも2種類のカエルに出会いました。空から獲物をねらうワシタカ類もいるようですし、ツバメなど里の生き物も確認されています。来年以降も「生き物調べ」を続け、入会地のいろんな仲間との出会いを楽しみたいと思います。

なお、今度の「生き物調べ」で個人的にうれしかったのは、センボンヤリというキク科の植物に出会えたことでした。ずいぶん前に滋賀県で見てから久しぶりの再会です。けっして珍しい植物ではありませんが、春と秋に異なる花をつけるところがすごい。春の花も今年の5月に確認しました。地表にたまった枯れススキが燃えて、目につくようになったからでしょう。野焼きに感謝です。

久しぶりに見たススキ草原

高野史郎

行事予定がバッチリ重なってしまって、10月の「コモンズふじわら・生き物調べ」が今年初めての参加となってしまいました。残念&スイマセン。

久しぶりに見る宿泊場所の葉留日野山荘のメタセコイア、でかいなあ！ 植えられたのはいつ頃？ ヤマボウシの赤い実、最近の市街地にやけに多くなっているハナミズキとは、実の形が違う。めしべの構造も違うんだろうな。見上げてごらん青い空！ 今年の冬は寒いのか？ 積雪予想を何人かに聞いてみました。かなり違う。果たして？

海老沢さんの案内で、茅場のテント前から生物種を確認しながら、時計回りにみんなで歩く。ススキの茂みの隙間に咲くオミナエシやツリガネニンジンなど。ミズナラの林を抜けて、何年前に作った茅葺屋根の休憩所はもう説明されないとわからないくらいの有

機物状態に。囲炉裏でいぶされる茅葺きと、長い雪の季節に押しつぶされた茅との比較。ススキの人生？もいろいろ。

申し訳ない。そこを踏みつけながら、またも見上げた空に、色づきはじめて晩秋の木々は、緑から黄色、真紅と豊かなグラデーション。あ、ミズキの枝をたくりよせて熊棚！ ツルウメモドキの黄色の実がはじめて、赤くなっている。コマユミもきれい、キレイ。

それにしても、あの重い熊がよく木に登れるもの。体重は人間よりも重いだろう。爪を立てながら4本の足を用意深く交互に出しながら登る？ 降りる時のカッコウを、ぜひじっくり見たいもの。昔は、枝打ち職人のプロフェッショナルがいたんだそうですが、熊みたいに器用に上り下りしたんでしょうか。



撮影：清水英毅

「里地里山でのモニタリング調査」について、夜、高川さんのお話を神妙に聞く。徹夜状態で資料を作られたとか。まったくごもつともで、フムフムと納得したような気分になるのですが、「生物多様性国家戦略」を、いままで全然関心なかった人に、短時間で説得する自信は全然ありません！

地元で長年、自然環境調査のお手伝いをしたり、報告書を作ったりしています。後になって、脱落していた情報が多いのにいつも後悔しては、またもう一度回ってみる。

KJ法の川喜田二郎さんが、「男3人、畑で作業している・・・」などと、東南アジアの農村を歩き回った後、長いメモを整理する段階になって女たちはどこで何していたんだろうと、もう一度調べなおしたという文章を見たことがあります。家の中で機を織っていたのに、気がつかなかったとか。

市民グループにタンポポ調査をお願いして、カントウタンポポのマップができた。でも、そのそばに外来種は生えていないことを確認したのか・見逃したのかの情報がないのに困ってしまったことがありました。エゾタンポポもある、中間的な雑種も増えている。東葛地域には、6種類ぐらいのタンポポが報告されています。

調査の失敗は数え切れません。秋、何百本と生えてきた野草の新芽をイヌタデと思い込んでカウントしたのに、春になってサクラタデが混ざっているのに気がついた、どうしよう。比例配分する？ 林の中に温度計を10本下げて、1日の温度変化を調べたとき、その2か所で夕日がまともに当たっていた、などなど。

100年間、継続しての調査など、とても全部はお付

き合いできないことは確実です。でも、1年に何回かは調べ歩きたいですね。

いま世の中、地方分権で費用対効果などと騒がしい。単年度で成果物を出さないといけないムードが風靡して、継続的な基礎データが欠落していく傾向が心配です。研究所や博物館の研究報告が、軒並みに“小物”になっていく傾向が見られます。

地道に楽しく、燃え尽き症候群になることなく、(もう少し先の長そうな若者が育てて・・・)続けていくのが、行政ではできない市民活動の可能性なのでしょうね。



ヤマアカガエル

撮影：海老沢秀夫

上ノ原の自然にふれて

高川晋一（日本自然保護協会）

10月13日に、初めて上ノ原の入会地を案内して頂き、今回で2回目となる「生き物調べ」に参加しました。調査ではカセンソウやツリガネニンジン、オミナエシ、アキノキリンソウといった、昔ながらの草原性の植物を多く記録することができました。久しぶりに日本のあるべき草原の姿を見ることができ、非常に嬉しく思いました。

上ノ原のように、燃料や茅葺き屋根の材料を得るために伝統的に維持されてきた「カヤ原」と呼ばれる草地は、エネルギー革命やライフスタイルの変化に伴い近年になって日本から姿を消しつつあります。明治時代には国土の12%を占めていた草地は、今や1%に満たないまでに減ってしまいました。そのため、カヤ原に住む多くの身近な動植物が今や絶滅の危機に瀕した種となっています。上ノ原は、特別に貴重な生物が多くみられる場所というわけではありませんが、関東平野では珍しくなりつつあるたくさんの草地性の動植物が普通に見られるという意味で、貴重な場所であると言えます。また、外来種（外国産の帰化生物）がほとんど記録されないことや、約10haという比較的大きな規模で草地が維持されていることも、他の場所には無い非常に重要な特徴です。

先も述べたとおり、現代の社会においてどのような新しい工夫でカヤ原を維持・保全していくかは、全国的にも大きな課題となっています。その中にお

いて、下流の都市域の市民が上流の地域に赴き、自然にふれあい、地元市民と交流し、共に楽しみ汗水流してカヤ原を保全していくという森林塾青水の皆さんの取り組みは、全国にも発信すべき先進的な取り組みであると言えます。引き続き皆さんで「生き物調べ」を継続し、上ノ原の自然の記録をとどめてその魅力や価値を再確認し、「上ノ原」らしさが何かを皆で探って頂けることを期待しています。また、森林塾のみなさんからは現在環境省の「モニタリングサイト 1000 里地調査」へ参加したいとの申し出を頂いています。このプロジェクトへの参加を通じて、上ノ原の魅力や皆さんの取り組みを、全国の他の市民団体に発信していただければ幸いです。

樹木医、藤原の森に学ぶ

伊東伴尾

森林塾の皆様しばらくぶりの投稿です。森林塾活動には年1回程しか参加できないのですが、今回もベストシーズンに清水塾長よりお誘いいただき参加しました。参加の動機は、本年8月に横浜国立大学の宮脇昭名誉教授の生態学研修に参加し、自然の環境条件（気候、地形、土壌、人の影響等）によりそこに生育する植物群集は同じということを実体験させられ、藤原の森の植生にも興味を持ったことです。今回は日本自然保護協会の高川さん、森林文化協会の海老沢さん、自然観察指導員の高野さん等、自然生態に詳しい方々の指導で生き物調べを行いました。

自然分布

自然分布では、暖かさの指数（積算温度：毎月の平均気温で5以上の気温より5差し引いた温度の年間累計）により、また、垂直分布では標高（1000mで6.5低下）により森林形態が決まるとも言われています。（積算温度）（標高：関東以西）

常緑広葉樹林	85md 以上	～ 800m
落葉広葉樹林	85～45md	800～1600m
常緑針葉樹林	45～15md	1600～2600m

（東京 135md 程度）（藤原は 75md 程度）

藤原地区の森林

藤原地区全域は落葉広葉樹林帯なのですが、群落としては1200mまではミズナラ林ですが、それ以上の標高ではブナ林に変化します。このことはサンワの森でも何気なく思っていたのですが、青木沢峠散策で中腹までミズナラ林が頂上付近でブナ林に変化する様を観て、自然生態の仕組みに改めて驚かされた次第です。また、林床植物が少なく明るい林内にも印象的でした。

青木沢峠のブナ



撮影：伊東伴尾

これらの成立要因を高川さんにお尋ねしましたら、積算温度の違いで群落が変わり、急傾斜地は積雪が流れて林床の植物が生育しにくいのではとの説明でした。また、土壤環境面で見ると、適度な湿地を好むブナ林に対し、乾いた土地にも湿った土地にも成立するのがミズナラ林といわれ、多雪地帯の日本海側のブナのほうが、葉が大きいといわれることをも併せ考えると、標高の高いところは雪が多く解けにくいことが影響しているようにも思われます。（森林生態に詳しい方、教えてください。）

マイガーデンの樹木

自宅を5年前に千葉の郊外に新築し、ささやかな楽しみに庭木を少し植えています。

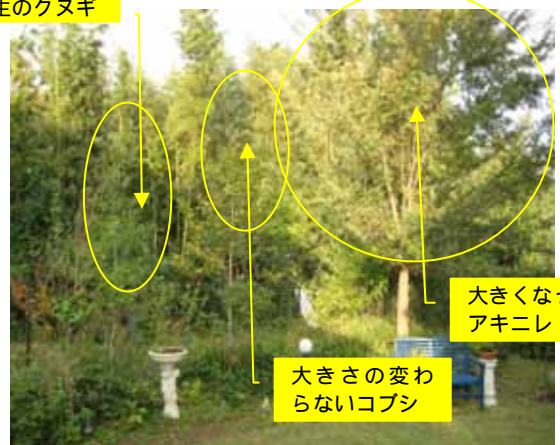
手入れは十分にはできないのですが、仕事柄植物の生育に興味があり、観察は続けています。成育の良いのが、シラカシ、レッドロビン、アキニレ、コナラ、クヌギ等で、成育の悪いのがハウチワカエデ、コブシ、ヤマボウシ等です。特にコナラとクヌギは新築時に近くの里山から拾って実生を育てたのですが、現在3m以上になり、成長の悪い高木と変わらぬ高さになってきました。植栽位置も日当たりなどを考慮しそれなりに（仕事柄）植え、管理もほぼ似たようにしているのに（あまりしていない）、それなのになぜ成育に差がでるのが以前から気になっていました。



* 4年前の庭木

撮影：伊東伴尾

実生のクヌギ



* 現在の庭木

撮影：伊東伴尾

そこで、8月の生態学研修で得た知識で改めてみて考えると、ここは千葉市内の平地ですので、自然群落からはシイ・カシ林、二次林はコナラ・クヌギ林地区（コナラ・クヌギは低地の落葉樹林で、潜在自然

植生のシイ・カシ林域が乾燥や林内照度アップ等で二次林として維持されている)です。成育の悪いのは落葉広葉樹林帯(ブナクラス域)の植物です。生態的にみると、我家の庭の樹木も自然植生の樹種に優位性があったといえます。(それ以外にも土壌条件等の検討は残りますが)

ブナクラス域の樹木には無理な環境下で苦勞をさせていることとなります。これらを育てるには、地域種を育てる以上に土壌の条件を良くし、肥培管理にも気を使わねばと思っております。

都市緑化の想い

都市の緑化は、もともと自然林にあった植物の中からの選抜や、品種改良等で増やし利用してきました。設計する場合、植物の特性を一応チェックし、デザインしますが、本来の植物環境まで考えていることは少なかったと思います。今後設計する場合、その環境が自然環境ではどのような場所になるかを考える必要があることを学びました。たとえば、屋上緑化ですと、乾いた環境なので地中海性気候のオリーブ、ローズマリー等が向いていて、マンションの日陰地は樹林の林床植物のアジサイ、ギボウシ等が向いているなどです。これらは以前から似たようなことは行っていました。もう一步踏み込んだ生態的理解が必要なのでしょう。これは植物にとっても(一応樹木医なので)、利用する人間にも良い景観が発展持続することができ、これらも自然との共生になるのでしょうか。

今回、清水塾長よりのお誘いで、都市緑化のあり方を自然生態面から考える良い機会となりました。このフィールドは、都会の人が自然の中で豊かさを感じたり、子供達の自然学習の場としても大切な役割を果たしていますが、都市計画に関わる人にも学びの場になると思いました。お世話いただいた関係者の皆様ありがとうございました。



撮影：清水英毅

甘くさわやかな草の香り

橋本八千代

今回初めて参加して思ったのは、五感の中で特に嗅覚が刺激されたことです。上ノ原に着き車から降りたとたん、さわやかで甘い草の香りに驚きました。あんなに強く、心地良い草の香りを嗅いだことは初めてです。カラマツ林の中にわけ入り、ササの下草や腐葉土

を踏みながらのキノコ採りも楽しかったです。

自宅に戻った次の日も、さわやかな空気の余韻が残り、頭もすっきりとした感じがしました。人間も自然の一部なのだ実感しました。

高川さんのセミナーも興味深い内容で、壮大なプロジェクトのほんの一部にでも参加できて良かったと思います。

これからも自然保護に関心をもち、小さな事から自分でできる事を積み重ねて行きたいと思えます。

青木沢峠古道整備を終えて

小野丞

今回のコモングのプログラムは一日目「上ノ原の生き物調べ」2日目「青木沢峠を歩く」でした。

昨年実施した青木沢峠古道整備に参加できなかったのが、今回行けるのをとても楽しみにしていました。また、せっかく整備した古道なので、年に1度は草刈りをしておかないと、元の状態に戻ってしまう心配があったので、今年中に状況を確認しておきたい気持ちもありました。



撮影：清水英毅

そのため、草刈り機を準備して、予備の燃料もあった方が・・・などと個人的に計画を立てていましたが、昨年整備をしたみなさんの言うとおり機械が必要なほど、草木が生えていませんでした。昨年整備に参加したみなさんの頑張り、心の中で感謝の気持ちと感動を感じていました。ただ、毎年1度は整備に来た方が良いかな・・・とは感じました。

今回半日で整備しながら楽しく歩けましたが、数年に一度にすると、1日かかりで、結構な作業が必要になりそうだからです。やはり、自然の力は凄いと思うほど、たくさんの幼木は生えてきていました。年に1度なら草刈り機で簡単に切れる程度にしか成長していませんが、数年たったら結構やっかいな存在になりそうでした。

今回の整備を終えて、来年はこの青木沢峠と、今年整備した芦の田峠越えも整備に行かなくてはならないかな・・・と感じました。

(完)

環境プランナーから見た森林塾の取り組み

上原 健（環境プランニング学会）

10月27日（土）28日（日）の二日間、群馬県みなかみ町藤原地区で開催された「茅場の視察とカヤ刈り体験」に初めて参加させていただきました。知人の代理参加だったのですが、もともと人の生活と自然環境の関わりに関心があったので、とても有意義な二日間でした。



小野 丞

茅ボツチの山

初日は、季節外れの台風20号の影響か、降りしきる雨でずぶぬれになったのでとても快適とは言えませんが、郷土館や改修途中の雲越家で説明を受け、入会の森を歩くことができ、期待にたがわず、豪雪地帯の暮らしぶりや茅場と里山から得られる豊かな自然の恵みを垣間見ることができました。また、宿泊先の葉留日野荘の熱めの温泉はとても気持ちよく、懇親会ではおいしいお酒をたっぷりいただき、話もはずんで言うことありません。二日目は、一転雲ひとつない快晴。周辺の山々の驚くほど鮮やかな紅葉に包まれ、すっかり観光気分。物見遊山の行事参加者には本当に満ち足りた小旅行でした。

一方、限界集落といわれる藤原地区のこれからを考えると、そう悠長なことは言っていただけません。地域の人々の暮らしと里山を保全するには課題山積みであることは想像に難くなく、藤原地区の住民と森林塾青水の皆さんのご苦勞が察せられました。

家に帰ってウェブサイトを見ると、森林塾青水は「地元住民や行政と連携し、先人や古老の知恵に学びながら里山の生態系や景観の保全、奥山集落全体のエコミュージアム化による活性化等に尽力。」した功績により「自然環境功勞者環境大臣賞」を受賞されたということですが、これからは野焼きや茅刈り、生き物調査、旧道の復旧作業といったその都度都市からの参加者を募る型の年間行事だけで、集落を活性化し続けることはたいへんだと思います。実際、首都圏から藤原地区に足を運ぶには時間もお金も掛かります。清水さんからも参加者を集める苦勞、天候との兼ね合いで行事の日程を設定する難しさを伺ったところです。

もし行事を通じて人を集めたいのであれば、懇親会のときに清水さんに提案したのですが、例えば

（企業名）杯「茅刈り選手権」のような形態にして、広報や人集め、参加者の旅行手配など、スポンサー企業になってもらってはどうか。イメージを高めたい企業にとっても単なる寄付より協力しやすいのではないのでしょうか。

ただ、集落の活性化を目的にするなら、最終的にはやはり産業、住民の生計を成り立たせる生業のことを考えないわけにはいきません。しかし、スキー場、ゴルフ場、温泉宿、別荘分譲・・・これら既存の事業を梃入れするには資金が必要ですし、自然環境を損なう可能性も大きい。それに普通にやっていると常に他の地域との厳しい競争にさらされます。

「集落全体のエコミュージアム化」が鍵になるのでしょうか。そもそもエコミュージアム化は可能？私には正直なところよくわかりませんが、他と比べて一番安い、施設が一番立派といったことを売りにする、いわゆるナンバーワン路線はまず無理でしょう。莫大な資金力が必要です。そうすると、取り組むべきはやはりオンリーワン路線です。特産物の販売を考えても、やはりオンリーワン路線の派生形のニッチ（隙間）ビジネスで新たなビジネスモデルを確立したいところです。都会の料亭などに葉っぱを売って今年年商2.5億円と言われる徳島県上勝町の「葉っぱビジネス」がひとつのモデルでしょうか。

オンリーワン戦略の成功の鍵は目の付け所とその事業にかける「思い」の強さと言われています。都会の人たちが「藤原に行かなければダメなんだ」「あれは藤原のものに限る」というものは何ですか？森林塾青水の皆さんは、村の人たちとのこれまでの交流で、村の人たちには当たり前でも都会の私たちにはとても新鮮だったり、驚きだったりする自然環境やモノ、技術や技能、心遣いやコミュニケーションをすでに知っているのではないのでしょうか。そこに藤原の暮らしと自然を守っていききたいという人たちの「思い」を乗せると、入会の山が、上ノ原のススキ原が地元の人たちのコモンズであるだけでなく、地元の人と都会私たちが共有するコモンズとして多くの人たちの共感を得られるのではないのでしょうか。

なんだかとても小難しい話になってしまいました。すみません。でも、森林塾青山の皆さんなら自ら楽しみながらいろいろなアイデアを出して、それを実現していけるのではないのでしょうか。私も来年の春、仲間を誘って野焼きに参加したいと思います。



撮影：笹岡達男

茅刈り体験をして見た夢のお話し 足本裕子 (文化遺産を未来につなぐ森づくりの為の有識者会議)

雨に煙る日、水上町藤原地区にお邪魔しました。

昭和50年までは、集落の入会地だったと言う山、200haのうち180haが、スキー場とゴルフ場になり、残った町有地20haを「森林塾青水」が5年前から借りて、茅場としての再生に取り組んでいる所。

昔はどこにでもあった茅場が、今は放置されている。侵入雑木や人工林施業のため林地になってしまったところも多い。ここでも、半分の10haは、雑木林化しているという。でも秋の茅刈りはもちろんの事、春の野焼き、雑木の伐採などの手入れを重ねてきた結果、茅も質のいいものが取れるようになって来たという。



撮影：笹岡達男

この藤原地区の活動が素晴らしいのは、刈り取った茅を、文化財補修の指定業者に買い取ってもらい利用できる仕組みまで作っている事。地元にもほんの少しだけれど、収入の道ができて来たと同じ、地元の方々の丁寧なお付き合いのうちに育まれ産まれたのだらうと推察し、素敵だなあと思いました。

参加した日、運良く、その茅を買い取って下さる町田工業の社長さんとも茅場で一緒に茅を刈り、お話を伺う事ができました。

私たちが刈り取った茅を5束1ポッチ500円で買い取って下さるのだそう。でも今は、茅葺きの屋根もどんどん無くなる一方。もっと需要があるといいのだろうな、と単純に思ったのだけれど、町田社長さんのお話を聞いていて安易な願望は吹っ飛んだ。

茅葺きの屋根を直すのに1800万円もかかるということです。普通の屋根にしたら300万円で済むだけだけれどね、と。さすがに楽天的な私もひるみませんでしたね。

というのも、ずっと一人暮らしだった母と昨年、同居を始めて、まずやった事は、実家の畳替えと屋根の修理。長年の雨漏りの為、二階の和室は畳も腐り、入れなかったのですよ。とにかく、自分の寝るところを確保しなければ。その工事費が150万。私にとっては、大変な額。

1800万円かぁ、無理よねえ、日本中の茅葺き屋根の家、残るはずがないよねえ、と一時はあきらめたのだけれど、でも、でもね、とまた考えた。

ちょうど朝食時に隣に座られた方が、中国まで植林に行きましたよ、もう40回以上も、と仰るのを聞いて思ったのです。たとえ自分が行けなくても、思いを伝えたい方、っているんじゃないだろうか。

今回の茅刈り作業だって、一人2万円弱かけての参

加なのですもの。もし1800万円のうち、800万円は、その所有者や村や町や篤志家で調達してもらおうとして、残りの1000万って、関係のない都会の人たちから集めることはできないのだろうか。それにしても一人1万円ずつ出してもらって1000人かぁ。

この1億2千万人もいる日本で、懐かしい里山の風景に茅葺き屋根があればなぁ、と思う人がたった1000人もいないのだろうか。最初は10人でも、100人200人と賛同者を増やす事はできないのだろうか。もし一万人も増えたらどうしよう。何軒も直せるよねえ。

中国に植林に行くという方のように、もう40軒も茅葺き屋根を直しましたよ、っていう人が出てきてもいいよねえ。

茅場の保全が発展して、茅刈りや地域おこしや、茅葺き屋根の葺替え作業の手伝いや、保存運動にまで、どんどん広がって行く。そうならいいな。そんな活動の「初めの一步」を踏み、歩き出している「森林塾青水」の方々の活動に釘付けになりそうです。

現に、毎年春先に野焼きをしている、広大な茅場を持つ四国地方の方に、この藤原地区のお話しをしてみました。でもあちらは、昔から入会地としての茅場の所有が入り組んでいて、なかなか上手に新しいことに取り組めないのだとか。というのも、元々、茅葺き屋根の葺替えは、地区ぐるみ。

茅葺き屋根のたくさんあった最近まで、「普請組」という制度があって、どこかの家が修理するとなると、茅と労力を出さないといけなかったんですって。だからみんながそれぞれ茅をたくさん取り込んでいるし、もし茅も労力も出せないとなると、数万円を供出ししないといけなかったんですって。でも今は、野焼きはしても生い茂る茅を刈る人は誰もいないのだとか。そういう地区から比べたら、藤原地区は、地域で合意形成が出来ているだけでも、もう数歩も先を歩んでる。



撮影：清水英毅

イベントもして、参加者みんなが楽しんで、また茅を肥料に利用しての野菜づくりの構想も伺った。そしてその他にも、ずばり茅葺き屋根の保全にも関わって行くしくみも考えていただけたらなぁ、と勝手な夢を見た事でした。

みなさまのご苦労も顧みず、好き勝手なことを書きましたが、お許しください。でも夢はたくさん見た方がいいですものね。

雨だったけれど、楽しく気持ち良く過ごさせていただき感謝しています。とても勉強にもなりました。ありがとうございました。

「森林を楽しむ会」から、茅刈りツアーに5人参加させていただいた。

11月10日(土曜)生憎の雨である。午後1時、山の口終い神事後、茅刈り作業。作業前に、茅の選び方、刈り方、束ね方を地元の方に教えていただいた。ご説明の後、ややあって「ねえ。ヨモギがまじるとフケるっていったけど、フケるってナーニ？」と奥様方から小生にご質問。「んん？」と口ごもる小生。(まさか「老ける」と思っているのではないだろうナ)可笑しさを噛み殺して、「ムれるってことサ。ほら、畳がフケるって言うだろ。ムレてクサってフカフカになることサ」というと、「フーン。そーゆーの」と、本心からは納得していない様子。フケるって上州限定コトバ？



撮影：笹岡達男

刈り始めて1ボッチ出来上がる頃から要領が分かり能率が上がってきた。半面、作業に慣れてくると、鎌の勢い余って左足近くまで引いてヒヤリ。鎌を引いた時に茅を持つ左手の方に滑り上がってまたヒヤリ。注意、注意と自分に言い聞かせながら作業を続けた。突然、近くで作業していた町田工業社長から「ウンコくさいネ。ネエ。臭うよネエ」の声。確かにクサイ。「クマかもしれネーナ。イノシシもいるし。・・・こないだ軽トラックを運転してたら、(身振りを交え)こーんなでっかいイノシシが3匹道にいて、ぶつかるって軽が壊れそうだったので、ぶつかるのをやめた」とか。ホントにそんな大物が出てきたらどうしよう。不安。(だけど、このニオイひょっとしてヒトのかもしれないゾ)と思いつつ、とにかく、ここは穂の付いたいい茅がいっぱいあるし、撤退せずに、フンをフまないよう注意をしながら作業を続行した。

午後4時、本日の作業終了。民宿「関ヶ原」へ移動。入浴後、山の幸主体のヘルシーな夕食を頂き満腹となった。7時からの交流会が、行事日程のメインディッシュだった。日本酒、イノシシ肉等たくさんの酒肴の中、まず、青水の活動がパワーポイントで紹介され、続いて、参加者全員がひとりずつ紹介され、一言ずつ述べ(させられ)るうちに、個人と会との係り、会と地元の皆さんとの関係、方向性や課題などがおぼろげに分った。多士済々の会だ。会と地元の皆さんの努力と協力、長い時間をかけて養われ発展し、今日の活動に繋がっている。飲み、語りはエンエンと続く。絆を確認し強めるかのように。

11月11日(日曜)雨。清水さんのご案内で、「森林を楽しむ会」のメンバーは全員、散策組に。舞台屋根修繕の計画、過疎化で荒れた古里を原風景に戻そうという取組み、茅場に押し寄せる森林化、開発による入会地の消滅、雲越家の貴重な家屋と夥しい数の民具の維持、地域の人々の暮らしから離れてしまったものがいずれも厳しい状況におかれている。

まだ現役で時間の制約があることから、小生のボランティア活動は婦唱夫隨の、アッシー君の域を出ない。一方で、CSR担当部署に係っていたこともあって、ボランティアについても、近頃あれこれ考える。青水は立派だ。活動趣旨は明快だし「飲水思源」の合言葉もいい。多年にわたり着実な成果を収め環境大臣賞にも輝いた。今回の参加は2日間、ネット1日の短期間ではあったが、いい刺激をあたえて頂いた。会員の皆さん、地元の皆さん、ありがとうございました。

ブータンと上ノ原の森

小堤涼子・さら

唐突ですが、ブータンという国に、尾黒鶴が越冬のためヒマラヤを越えてやってくる町があります。この町は鶴達が電線で怪我をされるといけないからというので、電気の無い生活を送り、鶴を驚かさないう静かに暮らしています。10年ほど前にこの町を訪ねた時、我々観光客がこの鶴に近づくと、鶴はさっと逃げていきます。しかしこの町の人たちが近づいても、全く動くことなくゆったりと餌をあさっている姿を目にしました。

先日、上ノ原で娘(さら)と萱ぼっちでおままごとをさせていただきながら、森林塾のみなさんが一所懸命萱刈作業をしていらっしゃるお姿を拝見して、そのブータンの町を思い出しました。数年後藤原のクマは、森林塾の方々が萱刈をしているすぐ横で、逃げも襲いもせずにごんぐりでもむしゃむしゃ食べているのではないのでしょうか。



撮影：清水英毅

今回初めて参加させていただきました森林塾のイベントでしたが、我々母娘は何もお手伝いができなくて申し訳ありませんでした。ごめんなさい。

しかし、我が娘にとって雨の上ノ原は、とても素敵な遊び場でした。何かの教育書で、「自然の中で感じるストレスが子どもの心を鍛えてくれる」とありました。

わが娘を「キレない子供」に育てるために、また機会があれば是非参加させていただきたいと思います。できれば他にもお子さんがいればもっと楽しいと思いますので、他の参加される方々も、お孫さんやお子さんをお連れになっていただければ嬉しいです。

茅刈りってカンタン

大前清祿

雲越さんの後に付いて茅場に入る。ススキ草原はススキだけでなく色々なものが生えている。雑草を刈り取って穂の出ているススキを目当てに刈り取って行く。役に立たぬとか騙すとか言う意味らしい細いキツネススキと言うのも一杯生えていて、最後まで騙されっぱなしだった。

雲越さんは何度もくり返して親切に教えてくれて、子束五把(こたばごわ)から一束(大束)ひとたば(おおたば) = 1ポッチにする方法もどうにか出来る様になり楽しかった。カマも研げる様になった。

雲越家の茅葺屋根を見学し、一つの疑問がとけた。千葉の方でも茅葺屋根を時々見かける。廃屋が多く屋根にユリの群生しているものを何軒も見た。「自然ってすごいな～。ユリの種が飛んで来て、茅が肥料になって見事に育つんだな」と思っていた。見学した時いただいた町田さんの資料によると、茅葺屋根の棟造りは芝棟と言って棟最上部の茅に杉皮を敷き、芝土を置いてそこにユリ等を植える方法があるらしい。植物の根で棟回りを強固にし、雨漏りを防ぐのだ。最も原始的な棟飾りらしいが昔の人は風流な上に頭がいい。

私が千葉の廃屋で見たユリは棟の芝土の中の子供だったのだ。目からウロコじゃないけれど、棟から種が落ちる思いだった。地方によって屋根の造りは多少違うらしいが、今は絶対そうなのだと確信している。

邯鄲(かんたん)のこと

茅場の中にはヨモギも生えている。アブラムシを食べる邯鄲の寝床だ。茅場にもいて鳴いているらしい。藤原のガイドマップには昆虫として名前は出ているが写真は出てなくて絵だ。それならと、千葉で簡単ではなかったけど探して現在30匹程飼っている。

鳴くのはもちろんオスだが「鳴く虫の女王」と呼ばれ低い声で「ルルルルルル・・・」と連続的に鳴く。初夏に生まれた時はうすみどり色でだんだん黄色が増えてくるコオロギの仲間。大きさは1センチ強で飼育しているものを多葉田さんに写真に撮ってもらった。ガイドマップの改訂版には写真が出る。

人間年をとると高い音(ね)が聞こえなくなり低く鳴く邯鄲は江戸時代より老人の最後の道楽として愛玩された様だ。秋の季語にもなっている。

邯鄲の音を聞くジジイ虫の息

生伏

邯鄲の事は知らなくても「邯鄲の夢」とか「邯鄲の枕」とか言葉だけを知っている人は意外に多い。邯鄲の名前はこの故事にあずかり命名されたと言われている。中国の戦国時代(日本は弥生時代、インドではお釈迦様がお生まれになった頃の話です)、趙(ちょう)の都・邯鄲で官吏登用試験に落ちた盧生(ろせい)と言う若者が、旅館で主人がコ・リャン(とうきび)を煮てくれている時、道士(どうし)(修行をつんだ坊さん)の呂翁(りゆう)が栄華が思いのままになるという不思議な枕を借りて寝たところ長い夢を見た。苦勞の末次第に出世し天下に号令をかける身分となったが、ふと目覚める



撮影：多葉田五男

とコーリャンがまだ煮えない程の短い間の夢だった。人生の栄枯盛衰のはかない事のとえなんだとか。

しつこくもう一句

耳鳴りを邯鄲の音と聞き違え

生伏

若者には理解の出来ぬ句と思います。お後がよろしいようで。

(完)

会員・会友だより

山の神さまに感謝

内野みつ子

10月19日カラマツ林の中でハナイグチを見つけ夜のつまみに。又、20日の昼はおにぎりを食べながらハナイグチたっぷりの味噌汁、ウンザリしたとも言えない雰囲気!

11月5日片品へ出かけ、ムキタケ、ブナハリ、ヤマブドウを採取、帰りに上ノ原にて期待どおり、いやそれ以上のナメコ。枯葉をかき分けると、あるわあるわ、丸いポタンのようなものから、大きくなり中央が茶色に光っているもの等、ありがたやありがたやの歌が出てきます。帰宅して直ぐに冷凍です。

11月10日のコモنزの昼食は具沢山のキノコ汁、翌日も「幸新」さんでキノコたっぷりのスイトンに舌ずつみ。上ノ原の山終いはキノコづくしでした。山の神さまに感謝感謝・・・。

来年も恵み多い年でありますように。



撮影：内野雄一

雲越家住宅修復工事着工・半分完成

木村伸介（みなかみ町役場）



撮影：町田工業

雲越家住宅茅葺き屋根葺替え工事について

工事名：重要有形民族文化財上州藤原（旧雲越家）の生活用具及び民家民族文化財保存整備工事

補助金名：国） 国宝重要文化財等保存整備補助金
総工費：4,000,000円

補助率：（国）1/2 （県）20.8% （町）29.2%

期間；平成19年度・平成20年度の2カ年

工期；今年度 平成19年10月～11月

来年度については未定だが、早い時期に行いたい

（文化財担当者）

工法；差し茅で行う

工事箇所；今年度 南・西面

来年度 東・北面

今年度の工事は発注が遅くなってしまい、初雪に見舞われながらも予定箇所の工事が終了しました。来年度については早めに発注したいの事です。

来年度予算について

来年度予算づくりの時期になり、「野焼き」予算を今年度と同じ金額で計上しました。

今後の折衝にて金額が決定することになりますが、かなり厳しいと思います。



撮影：町田工業

「同行二人」発心の道場編

川端英雄

真夏の四国・遍路道1200kmを、42日間かけて歩いてきました。

遍路今昔

遍路道は、815年（平安時代・弘仁6年・嵯峨天皇のとき）に弘法大師が「四国霊場」として開かれたのをはじめとして、1200年ごろには聖（ひとり修行して歩く僧）が、鎌倉・室町時代にかけては山伏が、修行のために歩いたといわれています。15世紀頃になって俗人が歩き出し、江戸時代半ばになって真念が「四国遍路道指南」を発行、これが大ベストセラーとなっておおぜいの人たちが歩くようになりました。とはいえ、当時はいまのような宿があるわけもなく、地図もなく、定かな道も多くはなく、いわんや道中に食堂があること少なかったことでしょうか。四国遍路は常に「死」と隣り合わせでした。事実、私が歩いた道々には多くの供養塔が建てられていました。

へんろ道保存協力会 編のよくできた地図を片手に案内板で確認し、速乾性のある衣類に身をつつみ、宿の予約は携帯で行い、お昼は道中の飲食店かコンビニで調達し、暑さにのどが渇けば自販機に駆け寄り、お金は郵便局で下ろし、宿には洗濯機・乾燥機があり、風呂に入り、ふとんの上で寝るといった安心と安全が保証された四国道を遍路してきた私、江戸時代のお遍路とはたいへんな違いです。



野武士のスニーカー

とはいえ、現代版へんろの私が考えることは、道中なるべく軽い装備で歩きたい「軽薄短小」でした。1枚80gのパンツもはくことも止めての減量、目標5kgには及ばずながら、6kg余のリュックを背負って歩き出した「ノーパン遍路」の始まりです。

神田までわざわざ出かけて買ったブランド物のポンチョを、雨のそば降る一番寺近くのJR坂東駅で身につけたものの、蒸し暑さの中で雨と汗で身もリュックもぐしょ濡れ。これならビニール製の数百円のポンチョで充分と思ったのもあとの祭り。道半ばの高知県でブランド物の靴のかかとのエアが抜けて、2足目を手配するのに大騒ぎをしていた若者の姿と思い合わせると、ブランド過信の至らなさを感じたものでした。因みに、私のスニーカーは、ABCマートで3900円で買ったものだけれど最後までトラブルを起こすことなく、この靴には深甚の敬意を表しています。まさに、お公家のブランド、野武士のスニーカーというべきでしょうか。

かぎりある身の 力試さん

発心（遍路をしようと思い立つこと）、徳島県内の札所めぐりを 発心の道場 と言い慣わしています。なぜ、四国遍路を思い立ったのかと幾人もの人から尋

ねられたけれど、供養？慰霊？懺悔？修行？願望？癒し？自分探し？死に場所探し？スタンプラリー？いまひとつしっくりこない。供養、慰霊のためにと何人もの方がまわっておられたけれど、私は毎日仏壇に手を合わせていて今更とも思え、懺悔するほどの悪人にはなれなかったし、願望・癒しを求めることもなし。さて、と考えてしまう。強いていえば、かぎりある身の力試さんために歩いているのかなあ？「マメが痛い」「暑い」に耐えることが修行と言えないことは承知のうえだが、痛みやつらさに耐えることが少なくなった現代では、やはり修行かも知れないと歩きながら考えた。さまざまなストレスに耐える「精神修行」中の会社・家庭・社会にある人たちよりは、かなり楽な修行なんだろうけれど。



大麻比古神社 HP より

余計なお世話のアスファルト

発心の道場の思い出。1番寺霊仙寺近くにある阿波国の一宮「大麻比古神社」は、大きく、気品と威厳があり、寺とはちがう神韻縹渺しんいんひょうびょうとした雰囲気があった。4番大日寺。「納経（寺で寺名を書いてもらい朱印を押しってもらうこと）」をいただくのに、「半紙ではダメ、納経帳を買ってきなさい」「なぜですか？」「宗教心の問題だ」といわれて、啞然。

清水塾長夫人のご実家鈴木内科の前を通過したのは、11番藤井寺の手前だった。

煙雨のなかを最初の 遍路ころがし 焼山寺・700m を登る。いつまでも続く坂。こんなところでサラシナ ショウマを写真に撮っているひとがいる。7月というのにウグイスの声しきり。白い沢蟹。途中で豪雨。つらかった。

7月10日。マムシに会う。はじめてもぎたての無農薬トマト3個のお接待を受ける。感激！

20番鶴林寺・500m。急坂の片側をアスファルトで固めている。「お遍路さんが登りやすいようにしました」と住職。せっかく修行の疑似体験をしているのに、余計なお世話ではないか。江戸時代の命を賭した遍路の思いに近づきたいのに～は、私の癖ひがみだけど～。境内で絵を描いている若者がいた。退職して遍路している・帰京してから再就職すると。次の寺に着くと、もうその若者が絵を描いていた、足のはやいこと。

雨中の 21番太龍寺 520m。静かに参拝をおえて一服していると、とつぜん大勢のお遍路が現われる。前後にだれもいなかったはずなのに？ありました、ロープ

ウェイが。台風4号接近の余波を受けながら波荒い日和佐海岸を、道中知り合った名古屋の登り坂が嫌い・蛇が嫌いなM氏とふたりで通過、徳島県最後の寺23番薬王寺に泊まる。同宿の4人でおおいに盛り上げる。

発心の道場（徳島）はのべ24寺・200km。涅槃の道場（香川）23寺・200kmと並んでお寺が混みあっている。また、へんろ道保存協会の案内表示がもっとも充実していて、極端な話、徳島県内は地図がなくても遍路ができるかもしれない。これだけ整備するまでのたいへんなご苦労が忍ばれる。

< 発心の道場編・完 >

第7回講座 commons の案内



撮影：浅川 潔

第7回講座 commons 村・ふじわら開催

雪の藤原でかんじきやスノーシューで雪原散策をしながら、冬の樹木や動物たちの足跡を観察します。

2008年2月16日(土)～17日(日)

雪原ハイキング(上ノ原)

冬芽の写真記録など(上ノ原)

編集後記 ～ 塾長のつづやき

今年後半のハイライト＝茅刈り。今年は、格別に嬉しい実りの秋となった。久さん、三郎さんの頑張りで合計 2,500 束弱という過去最高の収穫量を記録したうえに、茅の質も良かったからだ。独りよがりではない。11月17日、茅ポッチの山を引き取りに来てくれた町田工業の職人さん達が「今年は良い茅だ。去年は軽くて簡単に持ち上がったけど、今年は茅も束も良くて重いや」と言ってくれたのだ。良い茅の条件は1. 細かい 2. 芯が立っている 3. 穂がついている、の三拍子が揃っていることだそう。

茅刈りを再会して5年目、野焼きは4年目。この間、進入雑木の除伐も毎年続けた。今春、受賞した環境大臣賞にも勝る嬉しい瞬間だった。地元の皆さんとみなかみ町当局のいつに変わらぬご理解・ご指導の賜物である。大臣賞は少々の誇り、町田工業さんのご評価は大いなる励みである。今後も、力を合わせてより良い茅づくりに励みたいもの。

茅刈りに参加してくれる団体・ネットワークの拡がりも嬉しいこと。10月には昨年に続き、森づくりフォーラムと共催して「茅葺き視察と茅刈り体験」ツアーを開催。その際、松井理事より「来年は野焼きとセットのプランにしたいので、日程を早く知らせて欲しい」とお申し出をいただいた。また、11月には、

はるばる市川市から岩井市議会議員ご夫妻、小平市からは「森林を楽しむ会」の皆さん、そして地元・谷川温泉「金盛館」の若女将・須藤さんも参加、仲間入りしていただいた。こうした交流を通して、樹木医の伊東さんや環境プランニング学会の上原さん、「文化遺産を未来につなぐ森づくりの為に有識者会議」の足本さん達から、当塾の活動のあり方などにつき、それぞれの知見にもとづく貴重なご示唆をいただいた。まことに有り難く、この場をかりて改めて御礼申し上げます。



撮影：清水英毅

赤とんぼ茅野に
雲はなかりけり
ゆたか

今年後半のもう一つの重点テーマ＝生き物調べも楽しくやれた。そして、来年以降につながる有意義な活動となった。ことに、10月にご視察いただいた日本自然保護協会の高川さんからは大変嬉しいコメントを頂戴した。「本州全体でも、これだけ豊かな自然がひろがる草地はない。今日は、久しぶりに草地らしい自然に出会い嬉しい」とおっしゃり、「上ノ原における取り組みは正に先進的」とのご評価（激励？）までいただいた。来年から、環境省の「モニタリングサイト1000里地調査」の仲間入りをさせていただく中で、上ノ原らしさは何か？を皆で楽しみながら探っていきたい。

6月の木馬道（きんまみち）に続いて10月には、昨年再生した青木沢峠の道普請をした。ゆるやかな登り道を刈り払いしながら行くと、標高1000メートルもない山なのに美しいブナの斜面林が眼前に広がる。峠には、その下で何百年もの昔から村人たちが一服したであろう赤松の巨木。その根方には一基の石祠がひっそりとたたずんでいる。行きかう人々が、道中の安全と森の恵みに感謝の祈りを捧げた十二神様（じゅうにさま＝山の神）と聞いている。これだけでも、豊かな自然と歴史と文化が三点セットになった素晴らしいフットパスだ。でも、これが使われなければ宝の持ち腐れ。地元民宿やペンションに宿泊する都市住民にも知ってもらい、歩いて楽しんでもらって地域の活性化に少しでも役に立つというのでなければ、意味がないどころか我々の自己満足にすぎない。それでは、モットーの「楽しみながら良い汗をかいた」とは言えない。もっと、知ってもらい利用してもらおう工夫と努力が必要なのではないか。

他にも、もっと努力を要する課題が沢山ある。茅刈りの担い手を若い世代にも広げ、刈り残しのないように大量に刈り取るにはどうしたら良いか。刈った茅

の使い道は茅葺屋根材だけで良いのか。ミツナラ林の落ち葉と混ぜて肥料化したり、マルチ材として活用することにより「草地保全ブランド米・野菜」の生産・流通システムの具体化は図れないのか、等等。そんなこんなを思考していた11月の16日、全国草原再生ネットワークの設立総会に参加、各地の先進的な取り組み事例を学び大変な刺激を受けた。我々の当面する課題を考える上でも多くの示唆を得た。井の中の蛙にならぬよう、ネットワークに加入・交流して大いに見聞を広めたい。

11月3日～4日と「赤谷の森」体験ツアーに参加した。通称「AKAYAプロジェクト」、正式呼称「三国山地/赤谷川・生物多様性復元計画」の現状視察ツアー。1万ヘクタールという大規模かつ先進的なプロジェクトで学ぶところ極めて大であった。最も印象的だったのは赤谷プロジェクト地域協議会なる組織の存在。地元の旧新治村・猿ヶ京三国温泉郷の経営者たちが「大自然、森が有ってこそその温泉」との認識にもとづき、計画遂行のパートナーたる日本自然保護協会ならびに林野庁関東森林管理局との連絡・協調のために主体的に組成したという。我々の活動とは規模的に比較すべくもないが、地元・住民のみなさんの参画なしの地域活性化などあり得ないという意味において、大いに参考とすべきことではないか。これまた、今後の塾の活動推進上の根本的重要課題である。

地元といえば、10月20日～21日と開催された「藤原ダム50周年・矢木沢ダム40周年記念利根川江戸川上下流域交流フォーラム」の参加者の顔ぶれのことを思い出す。二日間を通じて、中下流域の多くの団体が参加、大変な盛況であった。が、参加者名簿にも会場を見渡してもダムのお膝元＝地元藤原の人々の名前も姿も見当たらなかった。地元不在の上下流交流会なんて！？まことに情けない気分になり、リレートークの場をかりて思わず、「私たちは『飲水思源』を合言葉にダム水源地＝首都圏の水瓶・藤原に通っています」と声を大にしてしまった。



撮影：清水英毅

とは言うものの、仲間の輪は少しずつではあるが確実に広がりつつある。生き物調べも始まり、来年からは「モニタリングサイト1000」入りもきまった。茅場と古道の再生活動を地道に続け積み重ねていく過程が、とりもなおさず「人と生き物が入り合うコモンズ村ふじわら」づくりの道程でもあるのだろう。そう思って、新しい年を迎えたい。

と

去年今年貫く棒の如きもの

虚子

(完)